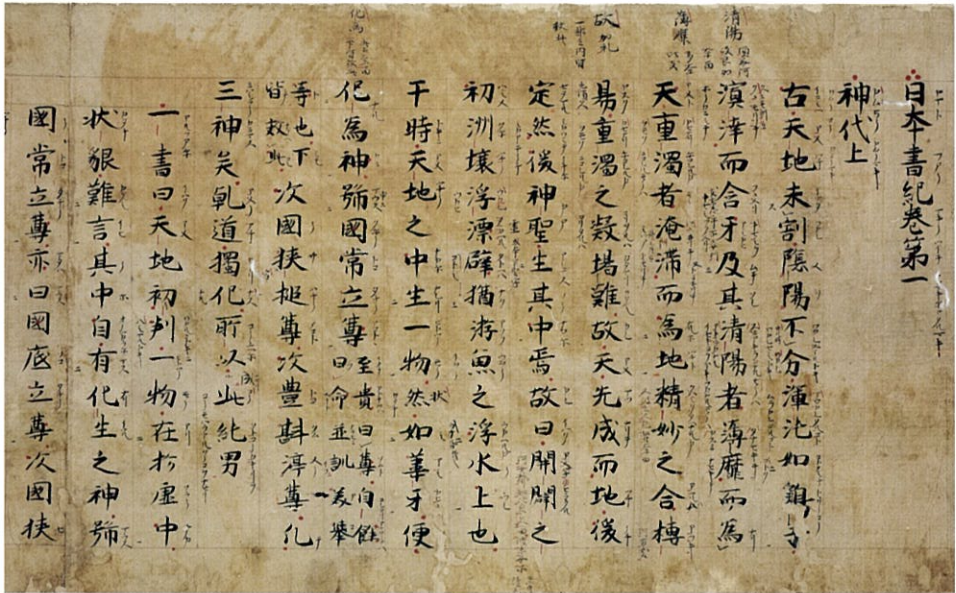


やまとの名品 天理図書館



にほんしょき けんげんほん
日本書紀 乾元本 (国宝)

乾元2年(1303)写 2軸

縦29cm 横(上卷)25m49.5cm (下卷)23m11cm

日本の草創期や古代について知ろうとするとき、まずはじめに紐解くべき書物は『日本書紀』ではないでしょうか。そこには、武勇にすぐれた日本武尊、八つの頭を持つ八岐大蛇、日本サッカー協会のシンボルマークとしても知られる八咫鳥が登場するなど、現代においてもなじみのある書物です。

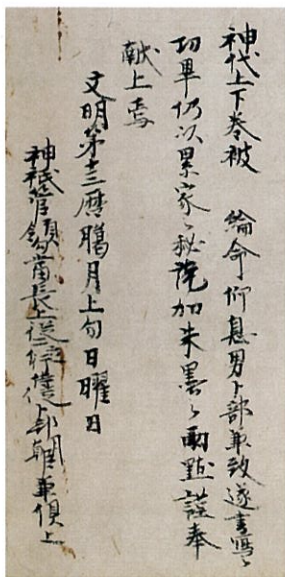
私たちにとって意外と身近な『日本書紀』全三十巻は、天皇の命を受けた舎人親王らが養老四年（七二〇）に編纂した、現存する日本最古の歴史書の一つです。なかでも、天地のはじまりから神武天皇が登場するまでの神話世界を描いた最初の二巻

は、「神代巻」と呼ばれ、古くから重宝されてきました。

本書は、乾元二年

（一三〇三）に書き写された神代巻で、その年号から「乾元本」とも呼ばれています。神代巻の写本としては、二番目に古いものです。

乾元本を書き写したのは、卜部（吉田）兼夏という人物です。彼の一族は、朝廷の祭祀に奉仕する氏族でした。神代巻は祭祀の教典とみなされてきましたので、卜部（吉田）氏独自の解釈



卜部兼夏の奥書（上巻）

などが記された乾元本は、家の存立に関わるほど重要な書物でした。本書の末尾に歴代当主が記した奥書は、そのことをよく物語っています（挿絵参照）。

ここに紹介した乾元本は、天理参考館で開催している「古典の至宝」展に出品予定です（神代上巻は第一期、神代下巻は第三期）。ぜひご覧ください。

（天理図書館 澤井廣次）